

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

『化身土巻』について

さて、最後の『巻』になりましたが、この『化身土巻』とは何か、どうにもわかりにくい巻ですね。今まで学んできて残っていることは「三願転入」の事だけです。これは、何も願が転入していくわけではなく、我々が往生の三内容を回入し転入していく、という事ですよね。その三往生を三願で表現するところに大きな意味を感じるわけです。

それは言うまでもなく「化身土」から「真仏土」へ転入するという事ですので、重要な内容には間違いないわけですが、それならば最初から「真仏土」に生まれればよいのに、双樹林下往生、難思往生を通して難思議往生に行かなければならないのか。勿論直接真仏土に生まれる、という事もあるでしょうが、それを迂回して三往生の転回を示さなければならなかった、その意味が『化身土巻』の主題ではなかったろうか、と思うわけです。そういうことを念頭に置きながら考えていきたいと思います。

課題 26 この『巻』にだけ、そして「19願」にだけ「この願成就の文は・・・」と丁寧に記せられているのはなぜか。また「20願」に「願成就文」という言葉がないのはなぜか。

『真仏土巻』において、「すでにして願います」という事を学んだように、12・13願は阿弥陀仏の根幹を示す願なので当然のことですが、この19願20願にも「すでにして・・・」があるわけです。しかもこの巻では特に「悲願います」です。このことが疑問であると前回も申しました。そのことをもう少し考えてみたいと思います。

前回は、18願から19・20願が展開してくる、と申しました。そのことを成就文の方から見てみようと思います。p327に「三輩の文これなり。観経の定散九品の文これなり」と述べられていますね。これは『大経（下巻）』p44に第11願成就文、第18願成就文そして第19願成就文が述べられています。ところが宗祖は、ここの三輩の文と観経の三輩の文と重ねて成就文と言われるわけです。

それでこの二つを重ねて読みますと『大経』の下輩の文に「かの仏を念じて至誠心をもって・・・」と出てきます。この至誠心は『観経』の上品上生（上輩）で三心が説かれるわけです。そういたしますと、この三心によって『信巻』が開かれるわけですから、言ってしまうと19願成就から18願が開かれてくることになるわけです。即ち『観経』の三心から18願の三信が出てくるわけです。ここに19願成就を丁寧に『大経』三輩・『観経』九品を言わなければならなかったのではないのでしょうか。だから19願は「すでによります」

であるわけでしょう。

(ついでに。上記の『大経』では下輩、『観経』では上輩。この相違は何か、という問題が残されている。)

それでは20願はどうでしょう。(p 347) この20願の成就文としては述べられていない。がしかし、それらしいことは次に述べられています。それは「・・・かの宮殿に生まる」と「・・・今思正法を聞くことを獲ん」という二つです。これが「果遂」の中身でしょうか。この二つは撰取と不捨を示しているのではないのでしょうか。

もう一つ着眼しておかなければならない言葉があります。それは、19願で「仮令の誓願、良に由あるかな」、20願では「果遂の誓い、良に由あるかな」とどちらにも「良に由あるかな」と言われています。どんな「由(ゆえ)」があるというのか。由とは由来、因という事ですから、理由・根拠という事でしょうか。これは親鸞聖人の“うなづき”でしょう。

この化身土において、19願と20願はどのような役割を成しているのか。つまり何故二つに分けなければならなかったのかを考えなければならないのではないかと。というのは、どちらも仏智疑惑で辺地懈慢界あるいは胎宮に生まれるのだから一緒じゃないか、とも考えられるわけですから。

それで題号のところに『観経』と『阿弥陀経』を配列し、願文が添えられていますね。その下には邪定聚・不定聚の機、そして二つの往生が示されています。そういたしますと、難思議往生たる『証巻』との関連になってきます。その『証巻』で述べましたが、十地の七地沈空の難を抜け出すのは如来の加勸でした。それが19願の臨終現前、現前導生と同じ意味ではないのか、という事を感じるわけです。つまり、どちらも如来が登場するわけですから、その点においては同じでしょ。

それでは20願はどういう意義があるのか。それを考えるに、注目すべき文章があります。それはp 345「しかれば、如来、世に興出したもうゆえは、恒沙の諸仏の証護の正意、ただこれにあるなり。ここをもって四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く」という文章です。ここからうかがえることは、「濁世の邪偽を導く」という事ですね。これが最終の救済、「唯除」にもつながってくるわけですが、ここに「果遂の誓い」と名乗る意味があったのだろうと推測いたします。そしてこの『化身土』が直接「真仏土」にはいかない理由がここにあるのではないのでしょうか。そしてこの「四依弘経の大士」という言葉がつぎの課題へと展開していきます。

課題27 「四依」が取り上げられている意味を考える。

まず、この「四依」が述べられてくる前段として五説を上げ、「この三経は大聖の自説なり」(これについては後に述べる)と抑えられている。これは聖道の諸教に対して「浄土真宗は」という相対的展開で述べられていくものでしょうけれども、そういたしますと、「仏説」とは何か、という課題を提唱しておいて「四依」が述べられていくわけです。

『正信偈』に「弘経大士宗師等 拯濟無辺極濁悪」と取り上げられています。この「弘

經大士」は「四依弘經大士、三朝浄土の宗師（p345）」ということで「四依」は省略されていますが、「弘經大士」は「四依弘經大士」のことですから、それだけ大事な言葉ですね。ここではp358に「しかれば末代の道俗、善く四依を知りて法を修すべきなり」と結ばれています。この「四依」はこの文章の前に引用されていますのでご覧ください。四つの依り所が述べられています。

第一は「法に依りて人に依らず」ですね。これはご存じの「自灯明 法灯明」の事でしょうね。第二は「義に依りて語に依らず」。これは「指をもって月を指う」の譬えで有名です。第三は「智に依りて識に依らず」ですね。ここでの智と識の違い、面白いですね。「智」は善悪を思索し分別する、と。「識」は正要には至らずとも常に楽だけを求める思想や文化の考えであろうと思いますね。

そして、私はこの中で4番目の「依了義經」が一番重要だと思っています。この文を読みます。「依了義經とは、一切智人います、仏第一なり。一切諸經書の中に仏法第一なり。一切衆の中に比丘僧第一なり。無仏世の衆生を、仏、これを重罪としまえり、見仏の善根を植えざる人なり」。これを皆さん、どのように読まれるか、感想をお聞きしたいと思いますが、まずは私の思いを述べさせていただきたいと思います。

最初は仏法僧の三宝の事について述べているわけですが、この三つ全部に「一切」と出ています。後半は無仏世の衆生は、見仏、仏を見抜く善根を積んでいない、と言われているわけですね。この二つの内容を合わせて考えてみると、「この世にたくさんの智人がいます。その中に第一である仏がいるんです。今の世人はそれに気づかないだけだ。」という事になります。また仏法も「たくさん書物が出回っているが、その中に第一の仏法がある。」と。そして「私たち民衆の中に、第一である比丘僧もいるのだ。」但我々には気付かないだけだ、という事を述べているように思っています。それが「一切」と述べられている事の意味でしょう。

その仏とは、ひょっとしたらボランティア活動している青年の中に居るかもしれない。あるいは漫画の中に仏法が説かれているかもしれない。あるいは何気ないサークルがサンガを形成しているのかもしれない、という事を意味しているのではないのでしょうか。ですから「了義經による」という事は、この現実社会の中で三宝に巡り合うという事を意味しているのでしょう。これは『証卷』で述べられている阿弥陀如来の「種々の身を現示したもう」という事とつながってまいります。

そして、仏教とは仏典や論釈ばかりという事ではなく、いろんな書物の中に仏教思想を説くものもあり、それを仏法と見抜く我々の眼が大事である、というわけではないでしょうか。無仏の世の、我々衆生は見抜く目がないという事を「見仏の善根を植えざる人」と言っているのでしょうか。

それでは、そういう我々がどのようにしたら見抜く眼が養われるのか。見抜けない我々は何者なのか、と言えまさか「濁世の邪偽 p345」なのでしょう。したがって、次に出てくる二つの「教誡」は、実に私たちのためにあったのです。

それでは、私たちにとって「仏」とは何か。私たちの仏陀観を検討しておかなければならないと思うんです。釈尊入滅後段々と仏陀観が変わっていきますね。そして大乘になると真理そのものをも佛と見るようになっていきます。でもここでいうところの「佛」とは三宝帰依の時の佛です。この「帰依」という時「*namas*」と「*sarana*」の違いがあるわけです。日本語的意味からいうと「尊敬・崇敬」と「拠り所」の違いです。この違いは何かと言えば、いろいろな違いがあるでしょうが、私は距離の相違があると考えています。前者は遠い距離を感じますし、後者は身近な近距離を感じます。

これは絶対的真理としての佛と、常に寄り添うべき師としての佛という相違があるのではないのでしょうか。そうしますとここで言われる「見仏」という時の佛は後者の意味での佛でしょうね。このことは、『後序』の法然上人をどう見るかという事につながっていくわけです。

課題 2 8 p358「邪偽異執の外教を教誡す」ということと p368「外教邪偽の異執を教誡す」ということを相対させると、教誡されるのは外教と異執であり、邪偽が教誡されるとは述べていない。この相違をどう理解すべきか。その根拠になるのが「真化を顕開して」と「真偽を勘決して」という言葉です。

ヒント p 345 に「しかれば、如来、世に興出したもうゆえは「恒沙の諸仏の証護の正意」ただこれにあるなり。〈中略〉真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く」とある。

ヒント これが「後序」に行き着く。「真化の門戸を知らず」「行に迷うて邪正（真偽）の道路を弁うることなし」という現実批判としての論拠が上記の内容であろう。

今これを考察するに、「外教」「邪偽」「異執」の三語の意味を明確にしておかなければならないと思います。で、外教は仏教に対するもの、邪偽は真正に対する言葉（邪に対して正、偽に対しては真）、それでは「異執」とはなにか。そういたしますと、『信巻』の回向発願心の p218 「一切の異見・異学・別解・別行の人等」あるいは「解行不同の邪雑の人等」、p219 「外邪異見の難」と出てまいります。これらについて『愚禿鈔』の p453 「群賊悪獣」に「異執」という言葉が出てきますね。今ここでは、外教と異執を教誡する、という事だから。外教について言えば仏教以外ですからほっとけばいいんですけど、何故問題にするのか、ですね。

そうしますと考えられるのは邪偽の外教性を意味しているのではないかと思います。仏教内の邪偽が外教的考え方をしている、と。問題は「外教・邪偽の異執」を教誡するという事。このことは、『下巻』の所で述べていこうと思います。

課題 2 9 いわゆる「三願転入」は何を物語っているのか。

この「三願転入」は真宗教学の要のようなものですので、その内容等をご存じの事と思いますので今更申し上げる必要もないでしょうけれども、真宗教学においてなぜ必要なのか、その存在意味、あるいは何のためのものなのかを思い巡らしてみたいと思うのです。

元々、浄土教は浄土に往生するのが目的になっております。ですから、往生する方法論がいろいろと述べられてきました。この時、生まれるべき浄土が「当然あるべき姿の浄土」という固定的前提のもとに、「浄土に生まれる」ことを模索していたわけです。

ところがこの「三願転入」によって生まれるところの浄土に相違が生じてまいります。つまり生まれる浄土がいろいろ変わっていくという現象が現われてくるわけです。そういたしますと「自分はどのような浄土を望んでいるか」という問題として意味づけられてきます。これまで固定された浄土観から「自分が願う」浄土観へと移っていく事は、重要な意味を示してきます。この意味とは、出来上がった浄土から浄土建立の時へと射程が回帰したことを意味します。それはとりもなおさず「浄土建立の本願」へと視点が向いていることを意味してきます。

何故浄土が建立されなければならなかったのか。それは、一切衆生の救済にあるわけです。生きとし生けるもの全てです。「絹飛蠕動の類」(『行巻』)も救われるためには国土建立しかありません。現代の言葉でいえば「地球」という事です。人間だけ考えるならば国家ですけど浄土は国家ではない、国土なんです。地球の中で人間だけ救われるという事はあり得ない。すべてが救われて初めて人間も救われるのです。

(またおもしろいのは絹飛蠕動の類のほかに「貧窮を濟う」(p158)と出てきます。これは経済問題です。絹飛蠕動の類は環境問題でしょう。環境問題と経済問題はまさに現代の問題です。)

これまで人間一人、私一人が救われる道は数々説かれてきた。しかしこの末法においてこの私一人が救われる道は、動植物の一切衆生が救われる道しか残されていないのです。

したがって、浄土真宗は「どのような浄土を願うのか」という命題を提唱しているといわざるを得ないわけです。言い換えるならば「我々はどのような地球を願っているのか」という意味を物語っているというべきでしょう。

まさに末とおとりたるみ教えではないか。どなたが言われたかわすれましたが、「浄土真宗は近代教学ではない。末法史観の教学だ。」という言葉思い出しましたが、まさにその通りだと思います。

課題30 『化身土(末)』とは何か。

この『末巻』は、最初の御自釈から「後序」の文まで全く御自釈はなく、また「後序」の始まりが「竊かに以見れば、」と前文とは関係なく始まっているので、前文の結びではない。そういう事から見てもここの文の趣旨は全く読み切れません。皆さんはいかがでしょうか。それで藤元先生の教えを思い出しますと、『末巻』とは『本巻』の「諸経の起説、五種に過ぎず。一つには仏説、二つには聖弟子説、三つには天仙説、四つには鬼神説、五つには変化説なり。」についての事例である、と言われるんです。

この「諸経」というのは仏教の書ばかりではなくあらゆる学問の書を指しています。例えば『日蔵経』「星宿品」などは天文学でしょう。また『月蔵経』の「諸悪鬼神得敬信品」

などは倫理学、「諸天王護持品」などは法律・教育学の範疇でしょうか。また天仙には「楼都の鼓を鳴らす」とありますので音楽でしょう。あるいは不老長寿の仙經などは医学でしょう。また鬼神などは人間の心を惑わし悩乱させてしまう、という事もあります。これは言わば洗脳でしょうか。カルト教ですね。仏教はカルトではないと思っておられるでしょうけれども、人を洗脳教化をしていないだろうか。(変化説は現代でいえば何を指しているのか?)

こうしてみますと、天人や仙人、あるいは鬼神などを頭ごなしに否定するのではなく、それらはすべて私たち人間の姿、能力の違いや学問専門分野の違いなどで分別していることであろうと考えます。そしてそれらはすでに「仏説の中にある」という事を意味しています。ここをもっと丁寧に読んでいかなければならないし、また現代の思想まで含めて、ここで問われていることを学ばなければならないことを切に感じているところでありませぬ。

ところで、「四種の所説は信用に足らず。この三経は則ち大聖の自説なり。」とありますが、あまりにも傲慢ではないですか。この「大聖の自説」とは何か、です。自説とは隋自意説の事、自らの悟りのままに説かれることです。対して隋他意説とは相手の考に順応して説かれることです。私たちの学問はほとんどが隋他意説の学問ではないでしょうか。だからこそ互いに研鑽して発展していく事もできるわけです。だから「それはいらぬ」というわけではありませぬ。それならば大聖の隋自意説とは何か、という事になってまいります。(それは佛佛相念ではないでしょうか。これも後に述べるつもりです。)

考えるに、逆に「四依」で触れたように、現代いろんな書籍の中にも仏説があることを意味しています。したがって現代においてそれを見抜くのは、私たちにかかっているという事です。そのことは、私たちに「もろもろの修多羅に拠って、真偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誡」する使命を持たせられた、という事に他ならないのであります。

課題31 p398の文、「後序」の文と呼ばれているが、はたしてこの文章は序文なのか。

親鸞聖人は「序」とは言っていない。序文でなければ、一体何なのか。

ヒント 内容は、親鸞聖人の身の上で起こった出来事が綴られているが、年代はばらばらである。

ヒント 経典に対する科文は、序分・正宗分・流通分となっている。この流通分にあたりとみることはできないのか。(参考；序分には全体にわたる総序・その部分のための別序という分類もある。善導の『序分義』では証信序・発起序・化前序の三序に数えている)

静かに思いを巡らしますと、この『教行信証』は「文類」でした。文類とは「いろんな書物の文章を集めた書」という意味です。それでは「いろんな書物」とは何か。それは親鸞聖人にとっては「仏法」なのでしょう。「四依」で説明したとおりですね。

そういたしますと、『教行信証』とは「仏法の集まった書」即ち『経』であると言えるの

ではないでしょうか。とするならば、「後序」は序ではなく「流通分」ではないかと思うんです。これは単なる呼び名の違いだけではなく、意味が大きく変わってきます。「流通」とは正宗分で説かれた内容が後に伝わっていくように述べられる文章の事ですね。因みに『聖典』ではこの科文は山辺・赤沼の『教行信証講義』に依っているとのことですが、この書の『序講』において（p57）「後序は化巻中に編みこまれているが、教行信証六巻製作の由来を記したもので、総序の如く、六巻全体に被むらすべきものである。三分科にあててみれば流通分である。」と述べられています。

だとすると、親鸞聖人の生涯の年代順になっていないことも納得できます。つまり「浄土の縁が熟して調達・闍世をして逆害を興ぜしむ」という一連の出来事が、実は親鸞聖人の時代と同じ出来事が起こった、ということ伝えていく、という事を意味しているという事でしょう。『総序』の文と対比しながら見てみるとすっかり重なりますね。だからここも『序』である、と言えるかどうかです。

これを私たちからみると、どちらも過去ですが、これが書かれた当時から言えば過去に起こったことが、この現実（親鸞時代）にも起こっている、という事を伝えることがこの文章の言いたいことではなかったのか、と思うんですね。この時の法然上人は仏でしょう。和讃はそれを讃じていますよね。（ご和讃で確認してください）ですから親鸞聖人にとっては、仏法僧の三宝が現実実現している、三宝に巡り合った、という喜びの事柄だったんだろうと思います。

さて、話を変えますが、この部分を「後序」として見る時、我々はどのように了解して読むべきなのか、という事を考えてみなければなりません。

そもそも「後序」とは「あとがき」という意味でお西では「後跋」と言っております。また古くは文章を書くとき、他人に書いてもらう時は前序、自分で書くときは遠慮して後序（あとがき）を書いていたそうです。宗祖がそれに倣ったとしたら、前序に「王舎城の出来事」後序に「親鸞本人の出来事」として述べられているとも言えないことはありません。でも、少なくともこのふたつの出来事の意味を重要視されている事だけは間違いありませんでしょう。しかも（p401）「しかれば末代の道俗、仰いで信敬すべきなり、知るべし」とありますね。何を信敬すべきというのか考えなければなりません、この言葉からは流通というよりはあとがきのように見えるわけです。でも聖人時代の出来事に視点を置けば流通分ですね。

したがって、顕の義でいえば「後序」、彰の義でいえば「流通分」という事として了解できるのではないのでしょうか。

結び これまで8回にわたり『教行信証』とは何か —『教行信証』撰述の意図—というテーマで考えてまいりました。結論を言えば表面上は法然上人の立教開宗に対する支持の書でしょう。勿論『選択本願念仏集』批判に対する擁護の書という意味もあ

ったんでしょう。しかしこの中で述べられる「隠顕積」でいえば「隠彰」の意味もあるという事を暗示しているのではないかと思うんです。それは「真の仏教はここにある」という宣言の書であろうと思います。

何か、無茶苦茶な話だと思われるかもしれませんが、一度お釈迦様時代に立ち返って実体的に想像してみたいと思います。

そうしますと、仏陀釈尊と民衆あるいは弟子たちとの会話がどんな会話だったんだろうか。弟子や民衆は釈尊をどのような人として付き合っていたのだろうか。その時の釈尊は絶対者だったのだろうか。弟子や民衆の上に君臨していたのだろうか。また釈尊は一か所には留まらずいろんなところに旅してまわっている。いつまでもいっしょに入るわけではない。それでも民衆にとっては仏陀なのだ。そういう仏陀とはどんな情景として映し出される姿なのだろうか。

次に、親鸞聖人あるいは当時の民衆と法然上人との風景を想像してみてください。釈尊時代の風景と全く異なるでしょうか。私には同じような風景がみえてきます。

釈尊、法然上人がおられるところに人が集まり、いろいろ話を聞いたり質問したり、笑ったり涙を流したりの一時を過ごし、後はそれぞれ自分の所に去っていく〔作礼而去〕。しかもそれは絶対者ではなく、強制的に集合させられているのでもなく、自然とその人に魅力を感じ、その人が語る言葉に頷き、周りの人と共鳴し合っている。そんな光景が見えてまいります。

そんな光景、現に私も経験したことがあります。会っている間は、その先生を「佛」とは思いもしなかったけれども、今は、私にとって佛だったのではないかと思っています。その時は私に「見仏の善根」がなかったんでしょうね。

親鸞聖人の和讃を見ると、法然上人はまさに佛だったんです。真の佛とは権威も集団力も全く必要ないんです。むしろ権威や集団力をもってするのを偽佛・仮佛というのでしょうか。『信巻』の「真佛弟子」釈には「弟子とは釈迦諸仏の弟子」とありますように「諸仏」と言われていることが大事なところでありまして、そのことを含めてもう一度大切に学びなおしていかなければなりません。

『化身土』p 352に「信不具足」が説かれ「この人、仏・法・僧を信ずと言えども、三宝同一性相を信ぜず。因果を信ずといえども、得者を信ぜず」と説かれています。上記の話でいえば、釈迦と話される内容と聞く人々は、仏法僧の三宝と言えるわけですが、この三つが同一性の相であるなら、その同一性の相を「一言」でいえばどんな言葉が的確なのか。釈尊時代、親鸞聖人時代、そして私たちの時代のなかで、言い当てられる言葉は何か。このことが「真仏弟子釈」に隠れているのではないかと思うのであります。そのヒントとして (p 245)「我が善き親友なり」、(p 250)「便同・・・韋提と等し」という言葉が気になっているところです。そういう事柄がどこで成り立っているか、です。

いろんな宗教の中で、教祖様として崇める宗教があるが、その人は果たして佛な

のか。その教祖様がどのような法を説いているのか、そしてその教団がどのような教団なのか、それらが同一性の相を持っているのか、そういうことを見極めていかなければなりません。

それから、三宝の佛と敬う佛と明らかな相違を認知していかなければなりません。前者は、いわば「師」です。後者は仏法に流れる精神です。「一切衆生が救われない限り自分は救われない」という精神です。「若不生者 不取正覚」という精神です。その精神を「法蔵」と言うんでしょう。この「師」としての佛と精神としての佛が相即するのです。

そういいますと、釈迦は初めから「私は覚者である」と述べておられるわけですから（初転法輪）、「これは仏法の精神に反するではないか」と思うわけです。それは「佛は絶対だ」という思い込みからくる誤謬ではないかと思うんです。釈迦と言えども生身の姿であるから釈尊伝に述べられる如く、釈迦もある老婆を諭すことができなかつたわけでしょう。また釈迦の故郷コーサラが攻められてあたふたするわけですね。実に人間らしいんです。そういう姿を佛と見えるか、まさに「見仏の善根」ですね。

私たちが同朋会運動を推進していく時、「帰依三宝」を旗印に推し進めてきましたが、帰依三宝が成り立ってきていたのか、法と僧があっても佛が不明確だったんじゃないでしょうか。

私たちはもう一度「見仏」「佛に会う」という事を考え直さなければならないと思います。という事は、仏に支点があるのではなく私自身に出会うべき支点があるかどうかという事でしょう。

思えば、かつて法蔵比丘は「光顔巍巍として威神無極」の世自在王佛に巡り合い、また阿難は「諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とまします」釈迦牟尼佛に巡り合ったわけです。親鸞は「源空存在せしときに 金色の光明はなたしむ」法然に巡り合ったわけです。私たちにとって「見仏」というのは言ってしまうと「輝いている人」という事であり、佛を見出すのは、実にこの私なのであります。

私が見出すその人は、決して権威に包まれている人ではない。むしろ権威・権力を必要としないままに輝ける人でしょう。何にも頼らずに自ら輝ける、それを佛と呼ぶのではないのでしょうか。そしてそこにこそ、法・僧が成り立つ、三宝同一が存在するのではないのでしょうか。私たちの信仰運動の同朋会運動は、まさに三宝同一の道理に立った時、真の信仰運動になっていくのではないかと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

話はそれてしまいましたが、これまで述べてきた姿を、この『教行信証』の外観として、今度はより深く見ていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

